議事１　平成２１年度松尾頭地区発掘調査について

Ⅰ　調査課題

「首長層の居住域」としての一面が強調される松尾頭地区において、大型竪穴住居跡や大型掘立柱建物跡の評価、それらと居住単位の関係を明らかにするなど、遺跡全体の中での位置づけを多角的に検討する。

今年度は窪地１、東側丘陵、９区の調査を実施。

Ⅱ　調査成果

１　３区から東側丘陵にかけての遺構分布について

① ８区東側の丘陵鞍部には竪穴住居跡数棟を確認しており、８区から北東側丘陵へと住居域が連続することが判明。また、８区で確認した SD64 が、鞍部までは伸びていることを確認。

② SI115、119 の検出により、終末期(Ⅵ-2)の大型竪穴住居跡が北東側丘陵にも広がることが判明。

③ SI34、45、SI61～66 など３区側の大型竪穴住居が後期後葉（Ⅴ-3）である一方、SI68、102、115、119 など７区～８区東側丘陵にかけての大型竪穴住居は終末期の所産であり、その分布域が東側へ移動したことが窺われる。

２　竪穴住居埋土の堆積状況について（SI115、119）

① 窪地あるいは平場として残った SI115 と SI119 の埋土は、上層が黒褐色土であり、住居中央付近では床面まで黒褐色土が堆積。松尾頭地区の竪穴住居埋土の分析ではいくつかのパターンが判明しつつある。こうした検出面から床面まで黒褐色土が達するものもその一つで、周堤が残存した洞ノ原地区 SI08 や、窪地の状態で検出された松尾頭地区 SI102 も同様のタイプである。

② 松尾頭地区では、このタイプの事例は７例（SI04、20、50、102、105、115、119）ある。このうち、SI115（窪地１）の黒褐色土からは須恵器片が出土しており、黒褐色土が相当長期間にわたり堆積した地層であることが推定される。

③ また、これらの遺構は全て弥生時代終末期から古墳時代前期の遺構であり、各遺構周辺の住居群の中では最も新しい遺構に属することから、最終段階の遺構は埋め戻さずに放置された可能性がある。

表１　黒褐色埋土が床面まで堆積する竪穴住居跡一覧（松尾頭地区、網掛けは窪地）

	遺構名	地区名	時期	備考
1	SI04	１区	古墳時代前期	床面付近まで堆積
2	SI20	１区	古墳時代前期	床面付近まで堆積
3	SI50	３区	終末期（Ⅵ－2）	床面付近まで堆積
4	SI102	７区	終末期（Ⅵ－2）	窪地として確認
5	SI105	７区	古墳時代前期	床面まで堆積
6	SI115	８区	終末期（Ⅵ－2）	窪地として確認
7	SI119	北東丘陵	終末期（Ⅵ－2）	窪地として確認

３　８区から伸びる溝状遺構について（SD30、31、52、64）

① SD64 東側については、丘陵鞍部にかけて平坦面のほぼ中央を通過し、東側の丘陵部に向けて伸びていることが分かった。

② 幅約 60cm、深さ約５cm。東側に行くに従い、浅くなる。断面形態は皿状となる。

③ 弥生時代の道の検出事例からは、やはり底面が硬化した溝、掘削された階段、あるいは木道などが道、通路として報告されており、SD64 に類似する事例はない。

４　３区南側の丘陵と小真石清水地区周辺との関係

① ３区に分布する住居群（Ⅸ群）が９区まで伸びていること、別の新たな住居群（Ⅻ群）を確認した。

② ９区では、大型竪穴住居跡が確認できなかったことから、大型竪穴住居跡は３区北側丘陵に分布が集中することが明らかとなった。